

『日本語の絶対語感』。このタイトルをご覧になって、直ぐに外山滋比古先生の著書を思い浮かべた方も大勢いらっしゃるかと思います。外山先生は、お茶の水女子大学名誉教授で、大ベストセラーである『思考の整理学』をはじめ、『日本語の論理』、『近代読書論』など数多くの著書があります。今年7月30日に96歳でお亡くなりになりましたが、「90歳を過ぎても旺盛に執筆を重ね、新聞を熟読して世の中の情報を得るなど、知的好奇心を失わない生き方でも注目を集めた」と報じられていました。ご冥福をお祈りしたいと思います。

私が数年前に読んだ外山先生の著書が『日本語の絶対語感』(大和書房 2015年)でして、日頃感じる言葉への戸惑いについて、「なるほど!」と頷くことができました。

それは、いわゆる「ら抜き」言葉についてです。「食べれる」「見れる」「来れる」など、枚挙にいとまがありませんが、なぜこうした変化が生じたのか、その背景について関心がありました。外山先生は、ここ10年くらいの間で、日本語の「絶対語感」で一番目立った変化をしたのは「ら抜き」言葉であると言われています。この「絶対語感」とは一生にかかわる言葉の基本であり、無意識にもっている言葉の規範であるとされています。そして、絶対語感とは精神的中核をなし、人は絶対語感によって人らしくなっていると述べられています。

「れる」「られる」を正しく区別して使ってこられたのは、子どものときに身に付けた絶対語感がしっかりしていたからで、「ら抜き」が多用されるようになったのは、家庭における「はじめの言葉の教え方」がおろそかになり、幼いときに正しい言い方を知らないまま、めいめいの絶対語感を固めてしまったためであること。「ら抜き」の現象は、言葉を短くしようとする時代の好みの表れと見ることができるとのこと。世の中が忙しくなり、テンポが速くなると、略語のように言葉も短くなる傾向が強まること、などが解説されています。

一方、言葉は多数決原理によって動くものであり、どんなに誤りだといわれた言葉でも、許容されて慣用になってしまうものであり、この絶対語感も多数派の慣用に基づいているものだと述べられていました。

近頃、テレビを見ていると、話された言葉が字幕でも表されることが増えました。これを見ると、今のところ、「ら抜き」で話された言葉でも、字幕では「ら」が補われて表現されています。番組制作者のこの姿勢が崩れたら、「ら抜き」言葉は標準的な言葉として市民権を得るに至るかと思います。子どもに教える立場を経験してきた者としては、「ら抜き」言葉に抵抗を感じるのですが、さて、今後どうなっていくのでしょうか。

他にも、私が最近「気になる言葉」として「やばい」があります。もともとは「危険なこと、不都合なこと」を意味した言葉だと思いますが、「この料理、やばい」「あの景色、やばい」などと「美味しい」、「魅力的」といった意味でも使われています。これも絶対語感の違いなのではないでしょうか。美しさを「やばい」と表現することには何か違和感を覚えます。

それこそ、日本語が「やばい」状態にあるのではないかと、思うのですが。こうした言葉の問題について、メルマガ読者の皆様は、どのようにお考えでしょうか。(N.W)